

たみと白っち

上林節子

2004年のクリスマスイブ。大阪キタの、巨大なビルが立ち並ぶ梅田駅界隈のずっと東。華やかなイルミネーションから離れ、けばけばしいネオンサインがひしめく一角の細い路地をいくつも抜け、遠くからクリスマスソングがときおり聞こえてくる住宅街の中の公園。その静かな暗がりの中、ブランコにすわる人影があった。

たみは寒かった。誰かそばにいてくれたら、と思った。ブランコの手すりにも手をかけず、ただ板の上にちょっと座り、上体をかがめて丸くなりながら、こぼれる涙をどうしようもなかった。クリスマスという言葉は、ザラザラした砂粒のように、たみとは無縁の世界のひびきをもっていた。なんでこんなことになったんやろ、と思うと泣けてきたのであった。

近くの交番の警察官が公園の入り口でオートバイを下り、懐中電灯を手に公園内の見回りを始めた。近づいてくる足音に、たみはあわてて涙をぬぐうと、カサカサした冷たい両手を出してブランコの手すりにつかまった。たみの二、三步先まで来た警察官が大きな声で言った。

「こんなところで何してる。早く家に帰りなさい」

懐中電灯の光を当てられて、たみはまぶしそうに顔をそむけた。

「なんや、おばはんやないか。こんなところで何してる」

「別に」とたみは大声で答えた。

「こんな寒いところにひとりで、どうするつもりやねん」

「ほっといてんか、おまわりさん」

「家族が心配しているんとちゃうの。はよ帰りなさい」

「うるさいなあ。はいはい、わかりましたよ。はい、さよなら」

たみは立ち上がった。「家族なんか無いんやから」と心の中でつぶやいていた。荷物は薄茶色の大きなショルダーバッグひとつ。四十歳になってホームレスになるなんてと自分自身を嘲りつつ、たみは歩き出した。どうしてこんなことになったのかは、考えない方がいいに決まっていた。ついさっきブランコに座って一人涙を流していたことも、もうどうでもいいことだった。公園を出ると、たみは明るいネオンサインが集まっている方に向かった。その後ろ姿をしばらく見送ると、若い警察官はオートバイに戻り、エンジンをかけ、別の方向へと走り去った。

そのままとぼとぼと歩きつづけ、ざわざわと人の声が聞こえる暗い路地に入ったとき、誰かがたみを呼び止めた。

「あの、すみません」

立ち止まって振り向くと、人の姿は無く、たみは空耳だったかとまた歩き出した。

「あの、すみません」とまた声がした。

たみはまた立ち止まり、キョロキョロとあたりを見回した。点滅するネオンの光を受けて、チカチカと小さく白く光るものが、たみの左足の靴の横にあった。何だろうとつまみ上げると、小さな人間の形をした生き物だった。たみは眉に皺をよせながら、目を

こらしてよく眺めてみた。小さな小さな顔があつて、輝く目がニコニコと笑いながらたみを見ていた。たみは、あついに幻覚を見るほどになってしまったのかと思ひ、背筋がぞつとした。その生き物が言った。

「すみません。とても寒いので、あなたのポケットの中に入れてもいいですか」

「…」

たみはその生き物をつまんだまま、状況のみこめず、ただぼんやり見つめていた。

「あの、寒いんですけど！」とそれは震え出した。

「…」

たみが言葉を失っていると、その生き物は小さく「ごめんなさい。エイ！」と叫び、たみの指からジャンプして、コートの左ポケットのふたの端になんとか両手でしがみついた。そして、たみがあつけにとられて見ているうちに、上手に中に入ってしまった。

「え、何？」

たみは驚いたが、確かにたみ自身も寒いと思っていたので、まあいいかと、そのままほうっておくことにした。全くこの世は、何が起こるかわかりはしないとため息ひとつついて、たみはまた歩き出した。

繁華街を抜け、あてもなく歩いた。ポケットの中の白い生き物はおとなしくじっとしていた。3分、5分…と時間が経って、なにげなく左ポケットの上に手をおいたたみはびっくりした。ポケットのあたり全体がぼかぼかしているではないか！

「ええ～！」とたみは思わず声を出した。そして、その暖かさにニコリした。立ち止まって、そうっと白い生き物を中からつまみ出してみると、それは気持ちよさそうに眠っていた。でもすぐにブルッと小さく震えて、目をさました。それが、目をこすりながらたみに何か言おうとしたときに、たみはさえぎるように言った。

「今度はこっちのポケットに入れてね」

またたく間に白い生き物は、冷たい右ポケットの中にスポリと入れられてしまった。たみは「おやすみ」と声をかけ、右手でポケットの上を軽くポンポンとたたいた。再び歩き始めて、右ポケットの暖かさを感じ始めると、たみはうきうきした顔つきになっていた。

「しかし、お腹がすいたなあ」

人の数がどんどん増え、たみは阪急の駅ビルに近づいていた。このまま行っても仕方がないと思ひ直し、立ち止まると回れ右をして、今来た道に戻り始めた。

「ああ、お腹がすいたなあ」

繁華街を抜け、いくつも路地を歩いて、またもとの公園にやってくると、相変わらず公園には誰もいなかった。

「ああ、もうだめだ」とたみは薄汚れたコンクリートのベンチにどさっと腰を下ろした。コートの右ポケットの中でギュと押しつぶされそうになって、白い生き物は「痛い！」と大声を出した。

「あ、ごめん、ごめん。忘れてた」とたみはそれをつまみ上げ、ポケットの外に出して膝の上に置いた。

「あんたのおかげで暖まったけどね、お腹がすいてもう歩かれへんの」

「そうですか。わかりました」

そう言うと、驚きたみの膝の上で、その生き物はブルッと身体を震わせた。

「何してんの」

たみの問いには答えず、その生き物はブルブルと震え続け、少しずつ回り始め、そのスピードはどんどん速くなり、ついに一本の竜巻のようになって回りつづけた。たみが呆然と見とれていると、その生き物はパッと消えてしまった。え〜っとふいをつかれたたみがまたたきすると、温かい湯気の上がる肉まんが一つ、たみの膝の上にあった。あまりのことにたみは声も出なかった。すると、どこからかあの生き物の声がした。

「どうぞ」

「これ、食べてええの？」

「はい、どうぞ」

震える手で肉まんをつかむと、もうがまんできずに、たみはひと口、ふた口とほおばり、「あ〜おいしい！」と言いながらあつという間に食べてしまった。ポケットからしわくちゃのハンカチを取り出して口の周りをぬぐい、ほっと目を閉じるたみ。そして目を開けると、また膝の上に例の白い生き物がいた。たみを見上げてニコニコしていた。

「ねえ、あんた、魔法使い？」

生き物は何も答えず、ただ笑ってたみを見ていた。クリスマスイブの夜はふけていった。空腹感が去り元気が出たたみは、その小さな生き物を両手でそっと持ち上げると、膝にまっすぐに、自分の方を向けて置きなおした。

「本当にありがとう。ごちそうさまでした」とたみは頭を下げた。

「ねえ、あんたどこから来たの」

「どこでもないところから」

「…。あの路地で、何してたん」

「前の人がね、そのつまり、あなたの前に、僕をポケットに入れてくれた人のことだけ。僕がポケットの中で暖かくしてあげると、最初は喜んでいただけで、そのうちもう必要ないと思ったのか、僕をポイと投げ捨ててしまったんだ。あの路地の近くで。だから、困ってしまって。寒くって…」

「あんたもかわいそうな身の上やね」

「ううん、そんなことないよ。僕の役割は、寒い、寂しい人を暖かくすることなんだ」

「ふうん」

「ただ、いらなくなると僕を捨ててしまう人ばかりで、少し悲しかった。だって、いつまでたっても友達ができないんだもの」

「ほんまに恩知らずで薄情な話やねえ。私は友達になるよ」

「えっ、ほんと」

「ほんまよ。私はたみ。あんたの名前は」

「名前は無いんだ」

「そら不便やわ。ほんなら…そやなあ…あんたは白くて小さいから白っちでどう」

「うん、白っち、白っち！ たみ、たみ、たみ！」

嬉しそうに大きな声で繰り返す白っちに、たみは照れくさそうに言った。

「やめて、恥ずかしいやんか。しかし、長いこと生きてると、不思議なことに出くわすもんやなあ。あんたみたいなのがこの世にいるなんて…。どこから来たのかもわかれへん、名前も無いということなら、もちろん年もわからへんよねえ」

「わからない」

「そうか。ま、いいよ。白っちと私は今から友達や。あんたは、まあいうたら、大切な命の恩人や。あのままやったら私は病気になるか、飢え死にするかやなあと思ってたんやから。ほんまにありがとう」

「僕、寒い季節は、肉まんしか出せないんだ。それでよかったら、また出してあげるよ。でも、たみはどうして、ひとりぼっちで食べるものも無い人になったの」

「まあいろいろあってね」

「僕は友達でしょ。話して」

「そうやな。実は、去年のクリスマスイブはこんなみじめな私やなかったんよ。仕事もあったし、職場の友達と一緒にケーキも食べたんやで」

「ふうん。なぜ、失くしてしまったの」

「私はね、阿波座の小さな会社でパートの事務員をして働いていたんやけど、今年六月にある事件があってね」

「事件？」

「うん。仕事の休みの日に、一人でスーパーマーケットへ買い物に行ったの。のんびりと歩きながら右や左にある商品を見ていたらね、突然警備員が来て、私の肩をトントンとたたいたんよ。びっくりして何ですかって聞いたら、その人が私にショルダーバッグのポケットから、値札のついたネックレスをつまみ出したんや。えらい高そうなネックレスやった。私にそれを見せて、こわい顔して、説明してくれますかって言うのよ。隠したつもりでしょうけどポケットから値札が出てましたよって。もちろん私は何もしてないから、知りませんって叫んだんやけど」

「信じてもらえなかったの」

「うん」と大きなため息をついて、たみはしばらく黙った。白っちも黙っていた。

「腕を引っ張られて、小さい部屋に連れて行かれた。なんぼ私が知りませんって言っても、結局警察の人を呼んできて、私は逮捕されてしまったんよ」

「そんな！」

「ほんまによう言わんわ」

「ひどいなあ。でも、いったい誰がそんなものをたみのバッグに入れたんだろう」

「さあね。たぶんね、誰かが盗んで、それを持って逃げる時に見つかりそうになって、とっさに身近にあった私のバッグに差し込んで逃げた、ということやないかしら。ほんまのところは、私にもわからへん」

「とんだ迷惑だね」

「ほんまに。まあ確かにネックレスは私のバッグに入っていたわけやから、警察も調べるしかないということよね。でも、防犯カメラの映像にも私が盗んだところなんか映ってなかったし…当たり前やけど…結局解放されたよ。けどね、そうなるまですごく時間がかかったんよ。何日も仕事を休んで、しかも万引きの疑いで逮捕されたということで、私は会社をくびになってしもうた。ずっと真面目に仕事をしてきたから、私のことは信

じてくれたと思うけど、まあ^{てい}体のいいイラストやね。会社もちょっと苦しかったみたいやし。これ幸いってとこかな。職場の人達は、会うとき大変やったねとは言ってくれたけど、以前とは違う感じやった」

「そうなる前に誰か助けてくれる人はいなかったの」

「警察では弁護士さんと呼んでもいいと言われたけど、私みたいなもんを本気で助けてくれる弁護士さんはおらんやろと思ったの。そやから、結構ですって言うたの。お金も無いしね。私はやってませんから、どうぞ存分に調べて下さい。でも仕事を失くすと困るから、さっさと調べて解放して下さいって。あのとき弁護士さんと呼んでたら、すぐ解放してもらえたんやろうか。何もわからへん」

「そうか。災難だったね。それで、たみは会社をくびになった後、仕事をさがしたんだろう」

「もちろん。そやけどもう四十でしょ。世の中不景気やし。雇ってくれるところは見つからなかった。なんとか貯金を使って頑張ってたけど、そのうちに家賃も払えんようになってしもうて、アパートも出たの」

「そうだったの」白っちの頭がぼうっと明るく光った。

「でも年が明けたら、また探すよ。まあ歳はいつてるけど、これでもコンピュータ使えるんやで」とたみは明るく言って、白っちに笑いかけた。

「その意気！ あきらめないでね」

「ありがとう。大丈夫、また一からやり直すから。あんたは優しいね」

白っちは照れた。するとその白い頭全体がイルミネーションみたいに光ったので、たみは大笑いした。そして、またため息をついた。

「今夜はどこで寝ようかなあ」

たみと白っちはそろってあたりを見回した。少しでも冷たい風をしのげる場所はないかと、暗い公園の端の方を注意して眺めた。

「ね、あの建物の中はどうかね」

白っちが指さす先には、古びた小さな建物があつた。行ってみようとうなずき合うと、たみは白っちをコートの中の右のポケットに入れて立ち上がった。

建物には扉も椅子も何も無かつたけれど、コンクリートの壁がわずかに木枯らしをさえぎるように思えた。公園の中を向いて窓が一つあつたが、雨や風にさらされたガラスは埃だらけだつた。建物の周辺には雑草が生え、ゴロゴロと石ころがころがっていた。たみはとりあえず中に入った。白っちはポケットから顔を出すと、たみを見上げて言った。

「僕ができるだけ暖かくしてあげるよ。この壁にもたれて座ったらどうかな。ね」

「そうやね。ありがとう」と言いながら、たみは冷たく硬い床に腰を下ろした。

「私、すぐに眠れなくてもかまへん。どうせいつか眠たくなるやろうから、ね。そやから、白っち、もう少し話をしようよ」

「うん、わかつた。じゃあ…たみのことをもっと教えて」

「そうやなあ。私はね、天涯孤独。私が小学校一年の時に父さんが亡くなって、それから中学校三年の時に、母さんも病気で死んでしまったの。兄弟姉妹も無いの。親がいなくなつてから、ちよつとの間親戚の家に預けられたけど、そこのおじさんが妙な目で私を見るようになって…それが怖くて、高校二年の時に家出した。学校もそのままやめてしもうて、大阪に出て働き始めたの。ほんまは十七歳やつたけど、十八や言うて年齢をごまかして、千日前の喫茶店で雇つてもろうた。店長さんがええ人で、私の事情を知つて親身になってくれはつた。アパート探しも一緒にしてくれて、保証人にもなつてくれはつた。私は毎日、朝から晩まで一生懸命働いた。遊びたくなかなかつたんよ。一日も早く一人前に生活したかつたからね。ほんまに店長さんのおかげで、悪い道にも引き込まれずに生活できたんや」

「そうか、よかつたね」と、白っちはポケットの中から首を伸ばしてにっこりした。

「店長さんが病気になつて、別の人と交替するまで、そやなあ、六年間くらいそこで働いたの。新しく来た店長とはあまりうまくいかなくて、この先どうしようかなと考えていた頃にね、ある人にプロポーズされて、結婚しかけたの」

「結婚しかけた？」

「そう。喫茶店の常連さんでね、営業をやつてるサラリーマンの人やつた。映画に誘われたり、食事に誘われたりして、半年ほど交際して、ある日結婚しようつて言われたの。ところがね、そんなことを言われて私とその気になつてたらね、ある時からぷつぷつと店に来なくなつてしもうた」

「どうして？」

「他にいい縁談があつたみたい。そやから…」

「ひどい奴。で、たみはどうしたの」

「私がおの人にプロポーズされたことは、店のみんなに知れてしまつたからね。それがあつという間におじゃんになつたわけやから、なんか嫌でしょ」

「うん」

「なんか、居づらいやん」

「うん」

「そやから、店をやめた。なんやもう、人が信じられんようになって、ちょっとやけくそになってた。最後の日に、店を出てから、入院してはった前の店長さんのところへまっすぐお見舞いに行ったの。久しぶりに私の顔を見て喜んでくれはったけど、しょうもないこと言うて心配かけたくなかったから、店をやめたことも言わずにおいたの。心の中で、お礼とお別れを言うてきた」

「それでどうしたの」

「何もやる気がしなかったけど、遊んでるわけにはいかんでしょ。そやから別の喫茶店でアルバイトして、だらだら生活してた。昭和から平成に変わってすぐの頃やった。そこのお客さんの中にね、鰻谷の小さなクラブのママさんをしている人がいたの。『あんた何か事情がありそうな人やね』って話しかけてきはって、結局、その人に誘われてホステスになったんよ。雑居ビルの中のちっぽけなクラブやったけど、ママさんはええ人やったよ。たみちゃん、大丈夫？ たみちゃん、そのうちにいい事があるよって、いつも気にかけてくれはった。そこで一生懸命働かせてもらおうた。途中で恋愛もしたし、ほんまにいろいろあったんよ。そやけど、どうもねえ、臆病になってたから、結婚という話からは逃げてばかり。そうこうするうちに、えらい不景気になってね。経営が苦しいと言いながら数年間、ママさんは随分頑張ってはったけどね、とうとうどうにもならんようになって、店じまい。私はちょうどいい機会やと思うて、それまで働いて貯めたお金を使って、何か勉強しようと思ったの。気がついたらもう三十半ばになってたし」

「ふうん。たみは真面目な人だね」

「いや、それほどでも」と、たみは少女のように首をかしげて微笑んだ。

「ね、僕を反対のポケットに移して。もうこっちは暖かいでしょ」

「うん、そやね」

たみは白っちをポケットから出すと、両手のひらで包み込むようにし、その目をのぞきこんで「ありがとう」と言った。そして左ポケットの中に白っちをそっと入れた。

「それで、何を勉強したの」

「ワードとエクセルを習いにいった」

「何？」

「コンピュータよ。ふふ、おかしな話やけどね、昔私を捨てたあのサラリーマンがね、いつやったか、これからはコンピュータを使えないと仕事ができなくなるぞって言ったのを思い出したわけ。十年以上も経ってからね」

「へええ。その人、いいことを言ってくれたということかな」

「まあそうやね。習ったおかげで、パートやけど、事務員として働けるようになったんやから」

「そうか。それじゃあ、たみはきっと新しい仕事を見つけられると思うよ」

「うん、ハローワークへまた行ってみるよ。年が明けたら、少しは事情が変わっているかもしれへん。私を雇ってくれるところがあるかもしれへん」

たみのその言葉を聞いて、白っちの頭がまた明るく光った。

「そうだよ！」と、白っちは光る頭を振りながら大きな声で言った。

その時であった。ぼそぼそと小声で話をしながら、若者が二人、たみがもたれている壁の反対側に近づいてきた。

「なにがクリスマスイブじゃ、あほらしい」と一人が吐き捨てるように言った。

「おまえ、金あるか。ペアっとゲーセンで遊びたいなあ」ともう一人が言った。

「無いよ。おまえは」

「無いから聞いたんや。親からくすねて来いよ」

「あほなこと言うな。そんなことできるか。今帰ったら二度と出られへん。うっとうしいおやじがおるからな」

「くそっ」と、もう一人がコンクリートの壁を蹴った。

いきなり背中に衝撃を感じて、たみは思わず「きゃっ」と声を出した。その瞬間に、まずいとたみは思ったが、手遅れだった。

「おい、誰かおるぞ」という声がして、二人の若者が壁のこちら側に回ってきた。中学生か高校生のような年恰好の二人であった。たみは思わず白っちをポケットの中に押し込み、身構えた。

「なんや、ホームレスのおばはんかい」

「はは。こんなところで夜明かしするつもりなんですか、おばさま」と背の高い方が顔を突き出して、たみに言った。

「あんたらに関係ないやろ。はよ、どっかへ行って」

「へえ、ホームレスにしては若いなあ」

「ほんまや。おばさま、おこずかいくれませんか」

「あほなこと。お金なんか持ってるわけないやろ！」

「そうかなあ」と、背の低い方がたみの大きなショルダーバッグに手を伸ばした。

「ちょっと、何するの！」とたみはその少年の手を押さえた時、もう一人の背の高い少年が、たみの左わき腹を蹴った。

「痛いっ」という声は、たみと白っちと同時だった。

引っ張られるショルダーバッグを両手で必死につかみ、たみは立ち上がった。その後ろから、背の高い少年が両手でたみの肩をつかんだ。

「じっとしてよ、ホームレスらしく、ね、おばはん」

「馬鹿にするんやないよ。私はテンポラリー・ホームレスなんや。あんたらみたいな悪がきにわかるか、この英語」と叫びながら、たみは背後の少年の手を振りほどこうともがいた。しかし、背の低い方の少年がバッグをもぎ取り、小脇に抱えて建物を出た。

「それ返しなさい！」と叫ぶたみの左わき腹を膝蹴りして、背の高い少年も建物を出た。ふたりは地面にバッグの中身をどさっと投げ出すと、中からたみの財布を拾い上げた。

「ちょっと、何するの。返しなさい！」とたみは駆け寄って、背の低い方の少年から財布を取り返そうとした。しかし背の高い少年が、今度はたみの右わき腹を蹴り上げた。

「うっ」と唸って地面に倒れこむ時、白っちがポケットから地面に転がり出るのを、たみは見た。そして次の瞬間に、白く光るものが、つむじ風のように地面の上で回転するのが見えた。うつ伏せに倒れたたみの目の前に、回り続ける白っちの姿があり、その姿が一瞬消えるたびに、湯気のあがった白い肉まんが一つ、二つと、地面に積み上がっていった。

「たみ、投げて！」と、どこからか白っちのかすれた声がした。

「わかった」とつぶやくと、たみは肉まんをとりあげ、少年達に投げつけた。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ…たみが力をふり絞って投げつけた先には、逃げまわる少年達の姿があった。「あちっ」「痛っ」「あちちっ」と叫びながら、少年の一人はそれでも財布を握っていた。たみは立ち上がると、もう一つの肉まんを手を駆けていった。「えいっ」とそれを少年の顔めがけて投げつけ、体当たりして財布を取り戻した。

どうやら騒ぎを通報した人がいたらしく、交番から駆けつけた二人の警察官が、たみの前で少年達をつかまえた。たみは、はあはあとあえぎながら、地面の上に座り込み、情けない顔をして立たされている少年達を眺めた。たみの顔は土で汚れ、右手の平は赤かった。

「大丈夫ですか」と警察官の一人が言った。

「あれ、おばはんやないか」と、前に見回りに来ていた若い警察官が言った。

「はい、すんません。大丈夫です」とたみはよろよろと立ち上がり、大きな息を吐いた。そして、はっとしたように後ろを振り向くと、白っちを探し始めた。

「白っち、白っち」と何度も名前を呼びながら、たみはあたりを歩き回った。その姿を見て背の高い方の少年が「おばはん、いかれてるわ」とつぶやいた。

「おまわりさん、ね、一緒に探してください」と駆け戻って、二人の警察官に取りすがり、たみは懇願した。

「白っちがおれへん。おれへんです」

「白っち？」

「はい。おれへんです」

「何言うてんの、おばはん、しっかりしいや」と、若い警察官が心配そうな顔で言った。

たみは少年達に駆け寄った。

「あんたら、見たやろ？ な、見たやろ？ あの小さな白い子。見たやろ？」

少年達は顔を見合わせると、二人で笑い出した。

「このおばはん、完全にいかれてるわ」

「何を言うの。あんたら、肉まんぶつけられて、熱かったでしょうが」

「肉まん？ 何の話やねん、おばはん」

「ほんまや。おばはんは、そこらの石ころを片っ端から投げたんやないか。白っちって何やねん。けったいなおばはんやな」

「見たやろ」

「見てない」

「熱かったやろ」

「…」

熱くはなかったと言いついた少年は、自信がもてなかった。無言でもう一人の方を見た。

「熱いわけないやんか」ときっぱり否定して、もう一人が言った。

「嘘ばかり言うて！ 熱いって叫んでたくせに」

「嘘やないよ。なあ。見てみ、肉まんなんかどこにも無いやんか」と、少年達はうなずき合ってたみに言った。

「嘘つき！」

一人の警察官がたみを制した。

「はいはい何の話かわからんけど、もうそのくらいにしなさい。とにかく君らはこの人に暴行して財布を奪った。そうやな」

「はい」

「はい、ごめんなさい」

「あほ。そんなことをして、謝ってすむと思うてるんか。さあ交番へ行くぞ。君らは中学生か、それとも高校生か。なに、中学生？ ほんまに悪い奴や。家はどこや…」

たみが立ち去る四人の姿をぼんやり眺めていると

「あんたも来て下さい」と、若い警察官が振り向いてたみに呼びかけた。

「はい」

たみは返事もそこそこに、さっきまで白っちと一緒にいた建物の中に入った。

「どこ？ どこにいるの？ ねえ、どこにいるのか教えて」

何も返事は無かった。たみはしくしくと泣きながら、壁にもたれ、コンクリートの床に座り込んだ。コートのポケットに両手をつっこむと、右の方にも左の方にも、かすかなぬくもりが残っていた。

「あほやな、白っちは。あんなにクルクル回って、あんなに次々と肉まんを作ってくれて、力尽きたんか？ そんなこと無しやで！」たみは泣き続けた。

「他のみんなに見えなくても、私にはちゃんと見えてたんや。幻なんかやない。そうやろ、白っち。あんたは私の友達で、命の恩人や。そうやろ？ いったいどこへ行ってしもうたん」

泣き疲れて、たみは黙った。かすんだ目のまま、ゆっくりと立ち上がると、建物の外に出た。少し前に蹴られて倒れたあたりにしゃがむと、両膝をつき、両手のひらで地面

を撫でた。大粒の涙がこぼれ落ちた。下唇をかみながら、たみはのろのろと立ち上がった。「あんたのこと、忘れへんよ。どこかにいるあんたが悲しまんように、私は必ず仕事を見つけるからね。約束する。来年のクリスマスイブは、誰かと笑ってケーキを食べる。そしてあんたの話をする」と、たみは心の中で白っちに語りかけていた。ありがとう。ありがとう。ほんまにありがとう。まるで一歩ずつそう言うかのように、たみは交番の方に向かって歩いて行った。